

看護を語る 看護を創る

看護は、さまざまな場所で、さまざまな状況で、さまざまな人々によって語られている。看護師同士で情報を交換したり申し送ったり相談をしたりしたときに、後輩の指導をしようとしたときに、自分の実践を振り返るような事態が起こったときに…。それらは、看護実践のあるスタイルを表現しているが、多くは実践に埋めこまれている。

私は、このスタイルを探求するため、多くの看護師の語りを聴き取ってきた。わくわくするような語り、ドキドキする語り、しみりする語り等々、いろいろな語りがあった。例えば、終末期にあって苦しむ患者のその状態をなんとかしたいと思いながらも、何もできないまま看取ったとき、自分の存在や実践を自ら問わざるを得なくなる。それが、インタビューの場で語り出されると、その語りに促されてその意味が捉え直される。それと同時に、何をすることが看護であるのかが発見される。感覚的に把握した患者の意識状態は、科学的な根拠がないとされ、言葉にしたり記録にとどめたりするのが難しいことが多い。ある看護師がその感覚を語り始めたとき、とめどなく芋づる式に言葉が生み出されてきて、驚いた。語り手自身も驚いていた。

他方で、言葉が飲みこまれることもある。まだこれは、語れない。まだ、誰かに開示することができない。涙を流しながらそう言った

人もいた。むしろ、ずっと語らず、ずっと自分のうちにとどめて、そのことを考え続けたい。そんな沈黙にも出会った。

こうした語りにじっくり伴走すると、言葉が生まれ、飲み込まれ、逡巡するその営みのうちで、看護という実践の意味が産声をあげていることに気づく。患者の状態になんとか応じようと懸命に動いていたときには、自分の足元に視線を向けることはなかった。しかし、それを振り返る機会が与えられると、言葉が分節化されて、形を成し始めるのだ。これらに「看護研究」という光を当ててみると、看護がいかなる営みであるのか、そこで何が為されているのか、いかに看護が達成されているのかが見えてくる。語りとその分析のうちで、看護が創造されていくのである。その方法は多様である。

本特集では、「看護を語る 看護を創る」をテーマにして、多様な場において実践している看護師の語りと、その意味を議論したい。さらに、それらに光を当てる方法論を検討したい。その成果は、看護がいかなる実践であるのか、語りを通していかに看護が創造されるのか、そこにいかなる知が埋め込まれているのかを浮かび上がらせてくれることだろう。同時に、本特集で紹介する看護の語りに触発されて、新たな「看護の語り」が生まれることを期待したい。

企画：西村ユミ（首都大学東京健康福祉学部看護学科教授）